

Turnier, Buhurt と Tjost

— 詩と真実 — II

伊 東 泰 治*

Turnier, Buhurt und Tjost
— Dichtung und Wahrheit — II

Yasuharu Iro*

I はじめに

先の小論「Turnier, Buhurt と Tjost—詩と真実—」（「ドイツ文学研究」22号，1990年）では，中世の騎士の馬上試合全般について考察する予定だったが，紙幅の関係で Buhurt の説明だけで終わってしまった。そこで二部として，Turnier と Tjost の競技様式の特徴を年代記と，文学作品の両方から検討し，あわせて宮廷騎士社会の生活様式の一端を明らかにしてみたい。

しかし，Turnier, Buhurt と Tjost という三つの騎士の戦闘競技は，時代，國，習慣の違いやまた当時の歴史家，詩人の理解の相違によって，その実態を明確に概念化することは難しい。

語源的には Turnier はフランス語からの借用語で（*mhd. turnei* < *fr. torner, tournoi*…）¹⁾，その動詞形 *turnieren* < *fr. tornoier, tourner*…は12世紀の初め以来「回る，旋回する，回転する」の意に用いられ²⁾，この意味は現在の *fr. tournoyer*に残っている。この *turnier* が12世紀終り頃になると「馬に乗って戦う」という意味を持つようになり，しかも戦場での真剣（真槍？）勝負にも，またある一定の規則に従って行われる試合，いわゆる Turnier に対しても用いられ，この語が用いられなくなった15世紀に至るまで変らなかった³⁾。

Turnier がいつ始まり，どのように形成されていったのかも定かではないが，すでに9世紀や10世紀の文献に見ることが出来る。当時はまだ後の Turnier を特徴づける要素は見られない。槍を扱うテクニックの進歩に伴い，次第に騎士の戦いの新しいルールが確立されていった。フランスの貴族 Geoffroi de Preuilly（†1016）がその創始者とされているから，11世紀のことであろう。Bumkeによると，歴史上確認される最初の Turnier は，1095年フランドルで行われたようだ。この時 Graf Heinrich III von Löwen は相手の槍を心臓に受けて即死した，相手はただ馬から突き落とすつもりだったが。そのため伯がまた最初の Turnier の犠牲者でもあった。

*国際文化学科（Department of Comparative Cultures）

1130年頃書かれた Karl von Flandern 伯（†1127）の伝記によると、伯は自國の名誉のためと、騎士たちの訓練のためにフランスに出かけ、多くの領主たちと槍を交えている。

Turnier は11世紀末から12世紀の間でも、1) 実戦を想定した試合であり、2) それ故試合に勝つことは名誉となり、評判を高めた。3) Turnier は現在のスポーツのように楽しみであり気晴しにもなったが、反面いつも負傷し生命を失う危険を伴った。そのため教会は絶えずこれを警告し、1130年最初の教皇による Turnier 禁止令が出た⁴⁾。

II Turnier とは

1) 通常解説書や辞書類には、次のように説明されている。

(a) Turnier (馬上槍試合) は、騎乗した騎士が槍でもって（まれに徒士^{かち}で、剣を振るって）勝負を争う騎士の試合。騎士制度の盛期には（1）戦闘競技のすべてを意味することも、（2）特別な戦い方に限定することもあった。Turnier, *turnei* は狭義には、槍（穂先を危険の少ない小さな王冠形のものにすることが多い）を持って騎士の二つの集団の間で行われた。参加者は勝負の相手を見付け、互いに馬を走らせながら、構えた槍で相手を鞍から突き落とし、捕虜にし、身代金などを獲得した。

(b) Buhurt は本来ゲルマン語起源のフランス語 (*behourd, bohourt*) で、ドイツに逆輸入され、古くは1150年頃 Regensburg の聖職者の作とされる「Kaiserchronik」に見られる。従って *turnei* という語よりも2～30年早く文献にあらわれたことになる。語の本来の意味は「衝突、激突」の意で、普通は甲冑を着用せず、楯と槍をもって馬を巧みに御しぶつかり合うショウ的な集団騎馬戦である。

(c) Tjost (一騎討試合)。真槍ではなく、試合用の安全な槍で相手を鞍から突き落とす (*abstechen, stechen*) か、または定められた箇所（例えば胸に固定された小さい円形の楯など）に突き当て (*Rennen*) て、技を競った。現在の *ausstechen* (…を負かす。…に打ち勝つ), *Ausstich* (試合や競技の決勝) は、ここから来ている。

2) 文学作品の中での Turnier の描写

数多くの例があるが、最初に騎士の基本的な馬上槍試合の記述をみよう。

(a) ハルトマン：グレゴリウス

グレゴリウスが養父の修道院長に、聖職者ではなく騎士として神に仕えたいと申し出る場面である。Gr. 1573-1620：

「私の願いは騎士の道です。私は心の中ではバイエルンやフランケンの騎士であったことはありません：いつも私はヘネガウかブラバントかハスペンガウの最もすぐれた騎士よりも巧みに馬に乗りました…今まで私は書籍を読むように強いられてきましたが、しかし心の中では常に Turnier をしていました (1584 *turnierte*) …心の中で、馬にまたがり、楯を構え、腕に抱えた槍を攻撃するために正しく水平に保ち、馬をギャロップで走らせる。そのように想像する時ほど幸

せを感じることはありません。脚を強く動かして馬を走らせる。脚をまげて拍車をあてる。腰や肩の部分ではなく、鞍帯の指一本後ろの処です。すると脚は馬のたてがみと競うようにとんで行く…、身体をばたばたさせないで姿勢を正しく保ち、静かに軽く手綱をさばくのは、私にとっては遊びのようなものです。槍を水平に構えて敵に向かってギャロップで馬を駆ける時も、馬を右左にと御するすべを心得ています。私は槍を水平に構えて一騎討ちを戦った (1617 *gejustierte < justieren, tjostieren*) 時は、敵の構える楯の四つの釘を狙って外すことはありません」

ブラバント、ヘネガウ (フランス語読みでは「エノ」)、ハスペンガウ (フランス語読みでは「エズベ」) は、現在のベルギーの中部地方で、当時は神聖ローマ帝国に属していた。北フランスに隣接し、フランスの文化、習俗の影響を受けることが早く、騎士制度、Turnier も例外ではなかった。「詩文の最初の小枝をドイツ語の幹に接ぎ木した (Tr.4738f)」フェルデケのハインリヒは、マーストリヒト (現在ドイツとの国境の町) の近くで生れ、フランスの叙事詩 *Le Roman d'Enéas* (1160) をドイツ語に翻案・紹介した。当時 Turnier が最も盛んに催されたのは、北フランスとフランドルと、ドイツ (神聖ローマ帝国) では上記の地方であった。

(b) ハルトマン：イーヴェイン

ハルトマンは、物語の主人公イーヴェインとアルトゥース王円卓の騎士ガーヴェインの一騎討ち (Tjost) を次のように描写している：Iw. 7075-7124

「彼らの馬は疾駆した。遅からず早からず正しい瞬間に槍を水平に持ち直し、ぐらつかないようにしっかり胸に押しあてた。そして高からず低からず、規則通りに正しく槍を水平に保ち、相手を大地に突き落とさんものと、互いに狙いを定めた。そうするとどちらの槍も、相手の楯と兜の間の (あごの) あたりに命中した。相手を鞍から突き落とす^{すべ}術を心得ている者は、そこを狙うのである。

その正しさが、その場で実地に示された。二人とも今までなかったほどひどくのけぞって、あやうく落馬するところだった。二人は落馬はまぬかれたが、槍は無事ではあり得なかった。二人は激しい勢いでぶつかり合ったので、双方の槍の柄が数百の断片に砕け、飛び散った。そこで誰もが言い合った。これほど見事な一騎討ち (7105 *tjost*) はまだ見たことがないと。大勢の敏捷な小姓たち (Kipper) が、大声で呼ばわりながら走り回った。小姓たちは各自二本か三本の槍をかついでいた。『槍はどこだ。槍はどこだ。これはあっちだ、あれはこっちだ』という叫び声以外は何も聞こえなかった。二人は幾度も突き合った。手持ちの槍はすべて折れた。もしも二人が騎乗のまま剣を抜いて戦ったら、一幸い彼らはそれを望まなかったが一馬はきっと命を落としたであろう。そこでやむなくそうした残酷なことは避けて、徒士で戦うことことにした⁵⁾」

7235-7504：「2人の決闘は明け方に始まって、正午をはるかに過ぎるまで続く…疲労のために双方体力も気力も失ってしまったので…戦いを止め…疲労がとれるまで腰を下ろして休んだ…体力と気力が回復すると、それまで以上の凄まじい斬り合いが始まった…見守る歴戦の勇士も…誰一人として2人の優劣をつけ得なかった…そこでこの2人が名誉と命を失うことを心配し、どちらにも面目が立つように引き分けようと…相談した…しかしアルトゥース王は皆の願いを聞き

入れなかった…2人の騎士の壮烈な斬り合いは果しくなく続き…夜になり、夕闇のため戦闘不能になり…決闘をひとまず中止して、翌日に延期することにした…ここで2人は互いに名乗り合って…相手が誰であるかを確認したので、友情の表明と和解の抱擁をした」

イーヴェインとガーヴェインの一騎討ちは明け方から、夕闇の迫る頃まで続いた。途中疲労のためしばし休憩して、再開する。夕闇で戦いが続行できなくて、翌日再試合というときに、2人が名乗り合って始めて旧知の友人であることを知る。ガーヴェインは「他人の紋章のついた武具を身につけて」いたが (Iw. 6892), また「兜と夜の暗闇が彼らの顔を包み隠し、激しい戦いで声がかれて変ってしまったので、2人が誰かお互いに分らなかった」 (Iw 7517ff) というが、このトリックも作者の弁解も子供だましであり不自然である。正午すぎの休息のときは、2人はどうしていたのだろう。作為的ではあるが、友人や兄弟同志が互いに知らずして戦う例は他にも幾つかある。エーレクとギフレイス王との2度目の戦い、パルチヴァールとガーヴァーン (=ガーヴェイン)、パルチヴァールと異母兄フェイレフィースの一騎討ちが類似の例である。

(C) ヴォルフラム：パルチヴァール

「パルチヴァール」に、Turnierの戦法を説明した箇所 (812,9-16) がある。パルチヴァールの義兄フェイレフィースがアンフォルタスに対して、Turnierのすべての型を試みたと誇っている。それには五つの型があって、第1は敵の集団に正面から攻撃をかける戦い方 (*zem puneiz* 正面攻撃)。第2は敵集団の左側を、即ち槍を構えてない側を攻撃する戦い方 (*ze triviers* 側面攻撃)、第3は同時に数騎の敵を相手にする時の戦い方 (*ze entmuoten* または *ze muoten*。別の解釈がある：助走をしない場合の槍の戦いの意とも)。第4は槍を構え、馬を疾駆させての一对一の戦い (*ze rehter tjost* 正規の一騎討ち)。第5は敵を追って攻撃を仕掛ける戦い方 (*zer volge* 槍を持つての追撃。ヴォルフラム：「ヴィレハルム」57,11と88,17を参照)⁶⁾。

Ⅲ Turnier 開始前の協定

Turnierの初期の実戦に準じた戦いは、次第にスポーツやセレモニーに化していったので、行事進行に関して事前の取り決めが必要になってきた。

1) Turnier 挙行の期日

Turnierは通常取り決めた日から3～6週間後に、曜日は月曜日に行われることが多かった。

(a) アーサー王宮廷で、エーレクの婚礼と祝宴が催されたあと、宮廷の騎士たちと客の騎士たちとの間でTurnierを行うことになる。Er. 2236-38：

「Turnierは次の月曜日から数えて3週間後、…(場所は)両者の丁度中間の場所と決まった」。

(b) 黒茨伯家の姉と妹の相続争いは、姉の側のガーヴェインと妹の側のイーヴェインの決闘で決着をつけることになる。決闘の期日についてアルトゥース王がいう。Iw. 5743-5745：

「人を告訴する場合は、相手に、決闘まで40日の猶予を与えなくてはならぬ。それがこの習慣だ」

(c) 隠者トレフリツェントがバルチヴァールに対して、自分の若き日の冒険の旅について語った。Pz. 498,22:

「私はローハス (シュタイヤーマルクの山) で3回の月曜日に (*dri maentage*) 戦った」

Turnier は通常月曜日に行われるので、「Turnier に3回参加した」の意となる。

2) Turnier の場所

(a) 一般には城や町の近くの広野で行われた。フリードリヒ・バルバロッサが1184年マインツで諸侯会議を召集した時、Turnier はマインツ西方の地インゲルハイムで行われることになっていた (6頁参照)。

大規模の Turnier は農地、農作物に被害を及ぼすことがあったので、13世紀には、Turnier の場所を定めるのが普通になった。

(b) ガーヴァーンとグラモフランツの一騎討ちの場面。Pz. 690,15-691,4:

「双方から軍勢が近づいて、予め決められている場所にやってきた。そこは樹皮を剥いだ太い柱でぐるりと境界が定められていた。グラモフランツは自分が挑戦者だったので、この費用を引き受け、樹皮を剥いで彩色した百本の柱を立てさせていた。柱で囲まれた中には誰も入ることは許されなかった。柱はそれぞれの側に50本ずつ立っていて、その間の距離は40ポインダー (1ポインダーは、敵に激突する時の助走距離をいう) もあった。戦いはその中で行われるのだ。両方の軍勢はその囲いの外側に控えていなければならなかった…グラモフランツとガーヴァーンが約束して手を打ち、そのように取り決めたのだ」

柵で囲まれた競技場のそばには、通常婦人の観戦席と、中央に審判席が設けられた。

3) Turnier の勝負の賞

勝者は当然のことながら騎士の榮譽を得、宮廷婦人の好意をうる。と同時に物質的な賞を手にすることが多い。それは敗者から得ることのできる身代金で、多くは相手の馬や甲冑を Turnier の賞とすることが取り決められた。中世後期の教訓詩作家 Hugo von Trimberg (Bamberg の Schulrektor,) は、その “Der Renner” の中で、一人の若い貴族を非難している。彼は「自分の生命を一頭の猪とか獅子とか熊に賭けている」と。Turnier の賞にそうした動物が提供されることもあったのだ。1280年に催された「マゲデブルクのグラールの祭典」は、商人たちの悪ふざけで、その時の Turnier の賞は「Frau Feie (*vrow Feie* 妖精夫人)」という名の美しい婦人であった。もちろんガハムレットが Turnier で獲得した二つの国の相続者ヘルツェロイデのような女王ではなく、春をひさぐ街の女であった。

4) Turnier 参加の騎士の人数

(a) 競技はすべてフェアでなくてはならぬ。それ故 Turnier 開始前に参加の騎士が集まって競技規則を決める必要がある。まず二つの部隊の構成とその指揮者である。諸国の貴族が連れてくる従者の数は一定してない。それを振り分け両部隊の人員を同数にするよう配慮しなくてはならぬ。

Ulrich von Lichtenstein が “Frauendienst” で紹介する1224年の Friesach の Turnier では、Her-

zog von Österreich の側の部隊は、彼以外の参加貴族 8 名、Markgraf von Istrien に率いられた相手側の部隊は彼以外 7 名の貴族が参加している。しかし各領主、貴族の引き連れた騎士の数は多い者は 100 名、少い者は 8 名とばらつきがあったが、結果は両軍ともにきっちり 300 名の騎士に配分されている。

(b) グループわけする時には、同國人は一緒にまとめるという配慮がされた。

Mons (ヘネガウの首都) のジルベールの記述によると、1170 年頃の北ラフンスの Turnier では、ヘネガウの騎士たちはフランドルとヴェルメンドワ出身の騎士たちと一緒に組んでフランスの騎士と戦った。

Ⅳ Turnier はいつ、どのような時催されるのか

1) Turnier は騎士の叙任式や王侯の婚礼の儀の際に催されることが多かった。

(a) モンスの Gislebert (ジルベール) の「ヘネガウ年代記」(1196 年)によると、先述したように神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ・バルバロッサは 1184 年聖霊降臨祭の日マインツに諸侯会議を召集した。その翌日の 5 月 21 日、皇帝の子息ハインリヒ王とシュヴァーベン公フリードリヒ V の騎士叙任式が行われ、それを祝って当時 62 才だった皇帝も参加して Buhurt が催された。翌週、場所を移しマインツ近郊のインゲルハイムで Turnier を行う予定だったが、死者 15 名も出る突然の嵐のため中止された。

(b) ヘネガウ伯 Balduin V は、1168 年 Valenciennes (ヴァランシエンヌは、現在ベルギーとの国境近くの北フランスの町) で騎士叙任の式を行った。引き続き多くの随身と共に、マーストリヒトの Turnier に参加した。その後も数年間フランドルやノルマンディーに行き、数多くの Turnier に参加している。

(c) アルドル (英仏海峡沿岸のパ・ド・カレー県) の教区司祭ランベール (13 世紀初頭) の年代記によると、アルドルの領主ギーヌ伯ボードゥアン II (ドイツ語読みでは、バルドゥイン) は、1181 年聖霊降臨祭の日に長男アルヌールの騎士叙任式を催した。祝宴は豪華で、来集した吟遊詩人、道化師たちにも大盤振舞がなされた。新しい騎士アルヌールは「この日から 2 年間方々の国を巡り、あらゆる騎馬試合に参加した」ようである。このような行動をとったのは、ボードゥアン II が小貴族であったためかどうかは不明であるが、アルヌールは十字軍遠征に参加しない者から「サラディンの十分の一税」を取り立てておきながら、それを各地の騎馬試合の費用に乱費し、あげくはエルサレムに旅立たなかった。

(d) 虚実をないまぜた文学作品に、歴史的現実を求めるわけにはいかないが、それでも年代記の伝える Turnier の基本線は逸脱していない、誇張のあるのは止むをえないが。

ハルトマンの「エーレク」、1887 行以下に、エーレクとエーニーテの婚礼の式の描写がある。式は聖霊降臨祭の日アルトゥース王が主宰し、その宮廷で催される。宴が終って様々な「宮廷の喜び」と共に Buhurt (Er. 2142) が行われる。Turnier は 1 ヶ月続いた祝祭の後、客人側からの

提案によって行われることになった。「楽しみを求めてあなた方の国ブリタニエに來たのだから、Turnier をしないで別れるのは、かくも勇敢な男にはふさわしいことではない」。アルトゥース側のガーヴェインが客人たちと相談して、Turnier の期日（次の月曜日から数えて3週間）と場所（双方の国の中間地点）が決められた⁷⁾。

2) Turnier はそれ以外の機会にも行われた。

(a) プレティヒャが「危険な娯楽—トゥルネイと決闘」の章で、「1127年8月12日は記念すべき日である」と書き初めるヴェルツブルクの町の城壁の前で催されたトゥルネイは、「ドイツの地で行われた最初のトゥルネイであった」⁸⁾。

1157/58に書かれた Freising (München の近郊) の司教 Otto (皇帝フリードリヒ・バルバロッサの伯父、†1158) の年代記 (*Gesta Frederici*) によると、Supplinburg (現在の Süpplingenburg, Braunschweig と Magdeburg の間) の王 Lothar は、1127年シュタウフェン家側のニュルンベルクを攻囲していたが成果なく、ヴェルツブルクへ退いた。シュタウフェン家の2人の兄弟、シュヴァーベン公 Friedrich II (†1147) と後の王 Konrad III (†1152) は軍を率いて彼の後を追った。彼らはヴェルツブルクの町の「城壁の前まで来て、そこで騎士たちと、今では一般に *turnamentum* (=Turnier) と呼ばれている騎士試合を行った」。

先述したように Turnier の規則は、フランスの貴族 Geoffroi de Preuilly が11世紀に定めたと言われる。フランス語の *tournoiment*, *tornoiemant* を最初にドイツに伝えたのはオットーであるにしても、このフライジングの司教が世俗の騎士の術語を正確に知っていたかは疑問である。上述の1127年のヴェルツブルクの Turnier は、Buhurt ではなかったかと Bumke は推定している⁹⁾。

(b) このヴェルツブルクの Turnier-Buhurt と対応するのは、ゴトフリード・フォン・シュトラースブルクの「トリスタン」のリヴァリーン (トリスタンの養父) とモルガンの決闘であろう。Tr 385-391:

「リヴァリーンはモルガンの城を包囲して、大小の戦いを仕掛け、いつも彼を城門の中まで追い返した。彼はまたしばしばその城門の前で素晴らしい *turneie und rîche ritterschaft* を催した」

この *turnier* は城内に逃げ込んだ敵方に対するデモンストレーションであろう。敵軍を前にして見方同志が体力を消耗させ、大切な武具の損耗を招くような激しい Turnier を行うとは考えにくい。これは前述の「ヴェルツブルクの Turnier」と状況がよく似ている。同じように Buhurt ではないだろうか¹⁰⁾。

(c) 伝記作家 Balderich von Dol は、トリーアの大司教 Albero (†1152) について興味深い伝記 (1152-1157) を残している。1148年大司教とラインの宮中伯 Hermann von Stahleck (†1156) の軍がモーゼル河畔で対峙していた時である。トリーア側の騎士隊は、宮中伯側の攻撃を待っていたが、その間騎馬競技をして時間をつぶした:

「何という光景がお前の前に繰り広げられたことか。模擬戦で訓練された完全武装の戦士たちが、荒馬をどんな狭い处でも右・左と乗り回し、互いに突撃し合うと、音をたてて槍が折れる。追撃する者とされる者の何という叫び声を、お前は耳にしたであろう。逃げると見せかけて、急

に引き返し、(攻撃して来る)相手の背後に回る巧みな手綱さばき、隊をなしたかと思うと、突然隊を崩してばらばらに離れる。退却と見せかけて反転し、攻撃して来る相手の正面から迎え撃つ。陣形の両翼の隊が方向を転回して相手の軍を包囲する。学ぶべき千に及ぶ戦術、千にも達する陽動作戦がある」。

V 騎士を Turnier にかりたてる動機は何であったのか

Benecke・Müller・Zarncke:Mittelhochdeutsches Wörterbuch III の *turnier* の頃には、4つの目的があがっている：(1) 実戦に具えての訓練 (2) 名誉をあげるため (3) 婦人の愛顧を得るため (4) 賞を得るため。

ウーリヒ・フォン・リヒテンシュタインも述べている。“Frauendienst”. 210,3 ff:

「Turnier に参加するのは、ある者は高い思いから、ある者は儲けを考えてのことである。多くの騎士たちはひたすら婦人のためであり、他の者は技を学ぶためであり、また名声を得るために Turnier に参加するのである」。

そのほかにも実戦から遠ざかっている騎士たちの力のはけ口、無為の克服のためもあるだろうし、発達する武具・装備や戦術のテストのためでもあっただろう。

1) Turnier は基本的には騎士本来の目的のために行われたのである。

(a) Turnier には、もともと軍事的面が大きな役割を持っていた。以前考えられていたように、中世盛期の戦術は、専ら騎士の個人戦に限られていたわけではなく、密集部隊における騎乗が、戦術を大きく決定することが判明した。それ以来初期の Turnier の軍事的意味と有用性が見直されるようになった。初期の Turnier は戦闘隊形の訓練や密集部隊の攻撃の戦術に役立ったのである。

また貴族の若い子弟が教会側の度々の禁止にも拘らずこの危険な競技に熱中したのは、当初から個人的に強い動機づけがあったからで、激しい戦闘競技は若い騎士たちに、自分の優秀性を示すチャンスを与えた。これが貴族社会に認められるきっかけになったからである。

(b) 13世紀に流布した格言風の教訓詩「Tirol und Fridebrant¹¹⁾」の中でこう言っている：

「Turnier は男子の価値を高め、その価値故に婦人方の賞賛を得る。Turnier, これこそ騎士のわざ」

(c) ハインリヒ・ヴィッテンヴァイラーは「指輪」の中で、ナイトハルトが Turnier の目的について述べている。899行以下：

「Turnier は婦人に奉仕するためだけに考えられたものではない。騎士道を示した学ぶために考え出されたものである。」

しかし15世紀初頭になれば、騎士文化はパロディー化されてしまったので、ナイトハルトのこの言葉にはしらじらしい感がなくはない。

2) 婦人奉仕を目的とする Turnier。

Turnier は婦人が関与することによって、宮廷的性格を色こく持つようになる。婦人が Turnier の熱狂的な観戦者になり、更には騎士が奉仕する婦人の名誉のために戦うとなればなおさらであろう。

(a) ジェフリ・オヴ・モンマス：「ブリテン諸王の歴史」(1130頃執筆，国王ヘンリ I [在位1100-35] の死後，おそらくその年の暮完成)。9 卷，14：

「彼らは食事で元気づけられると，町外れの野原に出かけ，ある者はこの遊び，ある者はあの遊びに加わった。騎士たちは模擬戦を考え馬上競技を始めた。婦人たちは城壁の上から見物して，この種の楽しみの常，激しい興奮へと（あるいは：激しい愛の焰を）かき立てられるのである。ある者は棒である者は槍で競い，ある者は重い石の投げ比べをした」

騎士の力戦と婦人の観戦・興奮はすでに一体となっている。

(b) ドイツの文学作品の中でも，こうした動機からの競技はかなり早く，1150年頃の「Kaiserchronik」に見られる。4563-72：

「ある朝，王 (Tarquinius) の喜びごとが起った：ローマ人たちが大規模な騎士の競技を催すことになった。この報せが Viterbo (イタリア中部の町) に届いた。すると宮廷の婦人たちは皆胸壁の上から観戦しようと急ぎかけ上った。ローマ人たちも婦人方の姿を見ると，一そう巧みに一そう速く馬を走らせようと懸命になった。ローマの騎士がいかに立派であるかという賞賛を得んがためである」。

(c) ハインリヒ・フォン・デム・テュルリンの “*Der âventiure krône*” (「数ある冒険の中のすぐれたもの」，1220/30年頃) でも同じように Turnier をする騎士たちを，婦人たちが城の館 (*palas*) から観戦している。騎士たちに装身具を贈って要請する。759-762：

「そなた達は婦人方の騎士であることを名乗り，そなた達の婦人のために (Turnier の) 打撃を甘受せよ」

さらにアルトゥース王宮廷の特別の習いとして，Turnier の際捕虜になった騎士たちはその婦人にゆだねられるのだと述べている (893ff)。婦人たちが城の館や胸壁から，Turnier を観戦している様子は，大ハイデルベルク歌謡写本のミニアチュールから想像することができる。(17-19 頁参照)

(d) ウルリヒ・フォン・リヒテンシュタインの自叙伝風の「婦人奉仕」(1255年) によると (40,5ff)，1223年ウィーンでオーストリアの Herzog Leopold VI の娘 Agnes とザクセンの Herzog Albrecht I (†1261) との婚礼の儀に続いて250人の若者の騎士叙任式が行われた：

「5000人以上の騎士が身分高き領主のパンを食した。その後 Buhurt，踊り，多くの騎士の遊びをした。高貴の大公の奥方とその愛らしい娘，それに多くの貴婦人たちが臨席し (観戦され)，そのため我々は喜ばしい気分になった」

(e) 騎士が，婦人の愛を得るための条件として Turnier 参加を求められるケースがある。愛は苦勞の末に得るべきものだからである。

クレチアン・ド・トロワ：「ペルスヴァルあるいは聖杯の物語」，小袖姫の巻，4816-5652行：

若い騎士メリアン・ド・リッツは父の封臣ティエボー・ド・タンタジェルの館で養育される。メリアンはティエボーの姉娘に愛を求める。姉娘は「騎士であること」が愛を受ける条件だと言う。そこでメリアンは冒険と武勲を追い求め、ようやく騎士に叙任された。にも拘らず姉娘は更に次の条件を持ち出す。「私の目の前で騎馬試合を行うこと」を命じて、父との決闘を受諾するよう促す。こうしてメリアン側とティエボー側との戦いが始まる。婦人や乙女たちはといえば、この試合の様子を出来るだけよく見えるように、塔のてっぺんにのぼる¹²⁾。

妖精のような小娘に、愛ゆえに騎士は唯々としてその意に従う。

(f) 愛の絶対性を示す例は、「ランスロまたは荷車の騎士」であろう。

王妃グニエーヴルはランスロの愛を試そうとして、彼女の臨席する馬上槍仕合で、彼が「最悪の振舞いをする」ようにと誓わせる。出来る限り卑怯に、そして滑稽に振舞うように命じた。ランスロは命じられた通りに戦って、列席者一同の物笑いになる。次の試合では反対に、「最善の振舞いをする」ように命ずる。そこでランスロは王妃の命令通りに戦って、一同の称賛を得た。騎士は婦人の気を迎えようとして、ある時は怯懦にある時は勇敢に戦う。それが宮廷騎士の典型とされた。

(g) Turnier が婦人の要請によって催された例は、1200年頃の作 “*Moritz von Craûn*”¹³⁾にも見られる。この Märe は宮廷騎士の婦人奉仕の茶番めいたパロディーではあるが。

作品の主人公のモデルは、政治家で詩人でもあった Craon (Anjou) 伯 Moritz II (†1196) であったようだ。原拠のフランスの作品は伝わっていない。

モーリッツ (Mauricius) はすでに愛の奉仕をして数々の武勲と名声をあげてきたが、彼が愛を求める Beamunt 伯夫人は、愛の最後の証しとして、自分の館の近くで Turnier を催すことを求める。「まだ一度も見たことのない Turnier を、この目で見たい」という理由をあげ、「お前は私のもの、私はあなたのもの」(592行)と口説き、自分の指輪を抜いて男の指にはめてやる。モーリッツはこの世で一番幸福な男だと感激して、伯夫人の頼みに応じる。途方もない金をかけて陸地を走る「不思議な舟」を造らせ、この奇怪な舟で多くの人々を Turnier の試合場に引き寄せる。夫人の願い通り Beamunt の地で Turnier が行われた。ただ本来の Turnier の戦いが背後に押しやられたのは、宮廷風な婦人奉仕に皮肉な目を向ける作者の意図に寄ったためであろう。

3) 実利を目的とした Turnier

(a) 「バルチヴァール」の第60詩節、女王ヘルツェロイデがカンヴォレイスの町で催す Turnier は、勝者を自分の夫に選び、自分の二つの国ヴァーレイス (Valois) とノルガールス (North Wales) を与えるという目的のためであった。Pz. 70,7ff:

「多くの勇敢な貧しい人々 (騎士たち、または従者たち) も立派に戦ったが、女王 (ヘルツェロイデ) のお定めになった賞を、つまり女王御自身とその國を望んでいるのではなかった。彼らは別の担保 (*pfant*) を狙っていたのだ」

この Pfant というのは、打ち負かした敵の馬、甲冑とか、それに相当する額の金銭や身代金を意味する。身代金の額は既述したように (5 頁 3) Turnier の開始前に取り決められた¹⁴⁾。

(b) Turnier の本来の目的を逸脱して、賞や身代金などの獲得といった実利を狙うのは宮廷騎士として望ましいことではなかった。エーレクは、アルトゥース宮廷での婚礼の儀のあと、初めての Turnier に参加する。そのために用意した甲冑、槍や馬、馬衣などについては Er. 2285 以下に詳しい。エーレクは15人の小姓 (Kipper) を連れて試合場に赴き、気のはやるまま前哨戦で 2 人の騎士と槍を交える。Er. 2425ff :

「自信にみちた (相手側の) 2 人はエーレクめがけて疾駆して来る。エーレクは先ず一騎を鞍から突き落とす。続く一騎も同じ目にあわせる。敗者の馬には目もくれなかった…乗り手を突き落とされて、あちこちと駆けまわる馬の姿を認め」(2446) た騎士たちは、エーレクの欲のなさに驚き、「彼を大いに賞賛した」(2452)

(c) 世襲権を持たない騎士の事例。エーレクはラク王の子息である。世襲の領地を所有し、国を統治する身分である。これに対して、(1) 正規の結婚をしてない男女の間に生れた子、即ち庶子は封土を受ける権利がない (Tr. 5409)。(2) また長子が父の全遺産を相続するという定めがあって、次男以下は「父の存命中に享受していた応分の権利が、父の死と共に一切奪われるのである」(Pz. 5詩節)。

そのためにガハムレトは父の死後冒険の旅に出ざるを得なかった。彼は(1) 最初バクダードにまで出かけ、カリフに仕える。「勇気ある彼は冒険を求めて倦むことを知らなかった」(Pz. 16詩節)。ついでアフリカのツァツァマंक王国に出かけ、女王の危難を救って女王とその王国を得る。(2) ガハムレトはやがて無聊をかこちひそかに妻のもとを去る。フランスのヴァロワで、その地の女王ヘルツェロイデの催す Turnier に参加して勝者となり、女王とその二つの領国を手に入れる (Pz. 95詩節)。

世襲の領土を持たない騎士が、槍一つで自分の幸福を勝ち得た典型的な例は、ウィリアム・マーシャル (1144-1219; フランス語読みでは、ギョーム・ル・マレシャル) である。ウィリアムの死後間もなく、1219年フランスの詩人によって「ウィリアム・マーシャル伝」が書かれた。ウィリアムはイングランドの Baron, John Fitz Gilbert の次男として生れた。そのため世襲の領国を持たず、自分の力で自分の幸福を勝ちとる外なかった。1167年騎士叙任式を終えると、Turnier を求めてフランスを転戦した。1170年イギリス王ヘンリー II の信頼を得て、ヘンリーの息子の養育係になり、プランタジネット家に忠誠を尽した。後当時最も幸福な相続人の一人「ストゥリッギルの乙女」¹⁵⁾、30才年下のイザベルと結婚してペンブルック伯 (Earl of Pembroke) になった。ジョン王 (1199-1216) の死後、1216年から1219年まで摂政を務めた。

当時 Turnier の先進国はフランスで、北フランスでは2週間に1回開催されたようである。これに参加したのは主としてイギリス人とフランドル人であった¹⁶⁾。ウィリアムの伝記には、彼が参加した12回の Turnier が報告されているが、その内イル・ド・フランス (パリの東部地方) とプロワ伯領で各4回、シャンパーニュで3回であった。

定収入のないウィリアムは何年間も Turnier で得た戦利品で生計費を得る外はなかった。有能な騎士には Turnier はうまみのある商売である。彼は同じ境遇の友人 Roger de Gaugi と一緒に、

10ヶ月の間に103人の騎士を捕虜にした。

ウィリアムは臨終の床にあった時、犯した罪を悔い、生涯の間に奪い取ったものを返却するよう求められると、彼はそれは不可能だと答えた：「私は500人の騎士を捕虜にして、武器と馬と甲冑を奪ったのだから¹⁷⁾」

(d) ウルリヒ・フォン・リヒテンシュタインは述べている。Friesach の Turnier で150人の騎士が自分の馬を失った。次の日多くの騎士は金貸し屋に走った。「捕虜になった人は皆ユダヤ人のもとに行かざるをえなかった。儲けた者は喜び、意気揚々としていた」(311, 3ff)。

VI Tjost (馬上一騎討試合)

Tjost は常に二人の騎士が相対し、槍を構えて互いに突進し、すれ違いざま相手を槍で馬から突き落とし合う競技である。

(a) *tjoste* はフランス語からの借用語で、ドイツで最初に使用されたのは Veldeke : Eneit である。200,35-201,18 :

「英雄 Pallas は楯を手に取り、手綱を握った。Turnus の姿を見たからである。Pallas は逃げることなく、槍を下げた。Turnus も同じく槍を下げた。2人の勇士によって、武勇のほどが示された。2人は思い通り相手に向かって馬を走らせた。2人の勇士はまことに騎士にふさわしい一騎討ち (*juste*) を行った。決して策を弄しなかった。両者ともにあやまたず、相手に巧みに突き当たったので、槍 (の柄) は折れ、破片は高く飛び散った。ただちに剣を抜いた。2人は剣の名手であった。彼らの馬はともに (衝突のはづみに) 腰を落としたが、共に落馬することはなかった¹⁸⁾」

(b) ハルトマンのエーレクの Tjost

フェルデケの描いたのは、ギリシャの英雄の戦いである。アーサー王円卓の騎士の Tjost の描写については、ハルトマンの「エーレク」が最初である。

エーレクは、正規の Turnier の始まる前、即ち前日の夕方に行われる前哨戦 (*vesperie*) で Tjost を行っている。Er 2509-10 :

「彼は正規の *tjost* を、甲冑をつけないまま次々に行い、槍をすべて折ってしまった」

(c) Tjost と Turnier の違いを明らかにしてくれるのは、Ulrich von Lichtenstein の語る1224年の Friesach の Turnier であろう。この地にオーストリアの貴族が集結した時、リヒテンシュタインの二人の兄弟 Ulrich と Dietmar はこの機会に騎士の競技を行った。Frauendienst 182, 3-7 :

「我々二人は伴の騎士を連れて、森に入ろう (*in ein fôreis legen*. 森の中で Ritterspiel をする意)。領主の会議が行われる間誰でも騎士の競技 (*ritterschefe*) がやれるように」

そこで一対一の戦いが競われ、リヒテンシュタイン兄弟は大きな成果をあげ、フリーザハに集まった騎士たちは10日間もの間 Tjost を楽しんだ。しかし聖職者身分の領主たちの間には、肝心

の政治上の係争がいつこう裁定されず、不満がつのった。そこでケルンテンの大公の提案で、この騎士たちの騒ぎを終らせるために「月曜日に Turnier を催す」との布令を出した。この知らせが伝わると、Tjost はすぐに中止された。次の月曜日に一日だけの Turnier, 集団の Turnier が行われた。

ここでは少くとも *turnieren* (242, 5) と *tjostieren* (243, 3) は全く違った催し物であることを示している。

VII 教会の Turnier 禁止令

1) 1130年教皇 Innozenz II がクレルモン公会議で非道徳的な競技に対して禁止令を出して以来、教会の禁止令はとぎれることなく続いた。これに違反する者に対しては、キリスト教による埋葬の拒否と破門とで脅した。

14世紀になって古い型の Turnier が行われなくなって初めて、一般の Turnier 禁止令が廃止された。

禁止の理由は、この競技が参加者の身心両面にわたって危険であるからというのである。更にはまた騎士たちがこの競技のために十字軍参加の義務を果たすことが妨げられるからともいわれた。

時には聖職者が個人的に Turnier の開催を取り止めさせたこともあった。1215年オーリーヴィエ師 (Meister Olivier) が、マーストリヒト南方の Lüttich で、Turnier 反対の説教をした：

「彼の働きで次週に行われる予定の Turnier が中止された。彼は試合場に 6 人の説教師を送り込んだ。彼らは十字架の意味を感動的に告げ語り、多くの人々に十字架の印しを付けた」(*Annales Reineri*)

度々の禁止令も、教会の努力もさしたる効果はなく、Turnier はしばしば挙行された。12世紀後半には世俗の貴族は自負心を持ち、教会側の刑罰による脅しに屈して自分たちの宮廷生活様式を変えることはなかった。

(2) 13世紀の有名な説教者ジャック・ド・ヴィトリ (†1240)¹⁹⁾は「権力者と騎士に対して」の説教の中で Turnier によって犯す七つの大罪をあげている。

第一の罪は高慢 (*superbia*) である。「神をおそれぬ人々とうぬばれの強い高慢な人々が、この騎士の競技において、何よりも衆の前で称賛と功名を得んがために、馬を乗り回すからである」。

第二の罪は嫉妬 (*invidia*) である。「相手が武器の戦いに勝ると思うと、嫉むからである」

第三の罪は憎しみと怒り (*odio et ira*) である。「相手を撲りつけ、余りにも乱暴に叩きのめし、しばしば致命的な傷を与えたり、または死にいたらしめるからである」

第四の罪は怠慢または悲しみ (*accidia vel tristitia*) である。「多くの Turnier 参加者は、敵方の攻撃に持ちこたえられず (自信を失ってなすすべもなく)、不名誉な敗走をする場合は大へん悲しいからである」

第五の罪は貪欲または略奪 (*avaritia vel rapina*) である。「相手を捕虜にして、身代金と引き代えに自由にしたり、勝って相手から、狙っていた馬を奪う場合がそうである。Turnier は、自分ではとても調達できないような高い金銭を要求できる機会である。Turnier をする人たちは自分自身の部下の所有物を奪い取ったり、畑の芽の出た作物を踏みにじり、また徴発したりすることを止めない。貧しい人々や農民たちに損害を与えたり、苦しめたりする」

第六の罪は美食・飽食 (*gastrimargia*) である。「世俗の豪華さを求めて、彼らは相互に宴会に招いたり、招かれたりして、自分の所有物だけでなく、貧しい人たちの所有物をもあり余る程ふんだんに消費してしまう」

最後の第七の罪は邪淫 (*luxuria*) である。「彼らは淫らな婦人たちの気に入ろうとして、戦闘に優れていると評価されると、この婦人たちの愛の印しを身につけるのが習わしだからだ」

説教者ジャックの邪淫の罪の指摘は、すでに13世紀の始めに、Turnier と騎士の婦人奉仕との間に関連があったことをうかがわしめる。しかしジャックがその際宮廷作家の Turnier の描写の影響を受けただろうという推測は否定し得ない。

(3) レーゲンスブルクで生れ、レーゲンスブルクで死んだ Berthold, フランシスコ修道士にして中世で最も偉大な説教師 (1210頃-1272)、彼にとっては Turnier は華美欲にとりつかれた貴族の尊大さ、不遜の表れであった。Turnier をこととする騎士たちは、危険な競技に聖地への旅を忘れてしまっている。それはまさに黄色い衣服を着た女 (化粧をし [*verwerinne*], 流し目をおくって言い寄り, 着飾って男の心を引く女 [*üelmacherinne, gilwerinne*]) と同じ類いだ。

ベルトールトにとっては、貴族の犯す様々な暴力行為も (Turnier はその一つである)、宮廷の楽しみとともに神の心を悲しめる行為なのである。「踊りをしようと、Turnier をしようと、サイコロ遊びをしようと、不作法な振舞いをしようと、はたまた略奪しようと、火を放とうと、盗みを働こうと、偽りの誓いをしようと、とにかくどんな罪を犯そうとも、そのような行為をなす人々を、神は心から憐み給うのである」

ベルトールトのような修道士だけではない、教訓詩作家 Hugo von Trimberg も Turnier を激しく非難する：「多くの愚かな俗人どもが、Turnier や Tjost で生命と魂と財を失っている」。

Tjost をこととする騎士たちは、墮地獄は必定である。「空中には多くの悪魔がいて、馬や衣服を自慢し、Buhurt と Turnier のための、婦人へのミンネのための出費を自慢する者たちを引っさらって行くのだ」

Turnier は時代とともに遊びになりセレモニー化してゆく。生命の危険度は少なくなろうが、反対に華美に走り出費は一そうかさむ。Tjost は一方では、途方もない遊びに堕した。

他方騎士の装備はますます堅固になり、複雑になった。槍を例にとれば、13世紀の始めは約3mだったのが、14世紀の終り頃には4.5~5mにもなった。攻撃力が増せば防備力をたかめなくてはならない。中世の軍備拡張である。武具の変化はまた騎士の競技の内容、形式にも影響を与えたであろう。

〔参考文献と使用テキスト〕

1. Bumke, Joachim: Höfische Kultur. Band 1 u. 11. 1986 (略: H.K.)
2. Bumke, Joachim: Geschichte der deutschen Literatur im hohen Mittelalter. dtv. 1990.(略: GdL)
3. Fleckenstein, Josef (Hg): Das ritterliche Turnier im Mittelalter. 1986.
4. Okken, Lambertus: Kommentar zur Tristan-Roman Gottfrieds von Straßburg. 2. Band. 1985.
5. Haupt, Barbara: Das Fest in der Dichtung. Untersuchungen zur historischen Semantik eines literarischen Motivs in der Mittelhochdeutschen Epik. 1989.
6. Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserlexikon. 1978-.
7. Curschmann und Glier: Deutsche Dichtung des Mittelalters. 3 Bde. 1987.
8. W.D. Lange, und K. Langosch: König Artus und seine Tafelrunde. Europäische Dichtung des Mittelalters. 1980
9. Heinrich von Veldeke: Eneasroman. Text und Übertragung von Hans Fromm. 1992; Eneasroman. Text und Übertragung von Ludwig Ettmüller und Dieter Kartschoke. 1986
10. Hartmann von Aue: Ercc. Text und Übertragung von Th. Cramer. 1968; 平尾, 相良, 中島, リンケ訳: ハルトマン作品集, 1982
11. Wolfram von Eschenbach: Parzival. 2Bde, Text und Übertragung von W. Spiework. 1981; 加倉井, 伊東, 馬場, 小栗訳: パルチヴァール, 1974
12. Chrestien de Troyes: Perceval oder die Geschichte vom Gral. Übertragung von Konrad Sandkühler, 1957
13. Gottfried von Straßburg: Tristan, 2Bde, Text und Übertragung von R. Krohn, 1980; 石川敬三訳: トリスタンとイゾルデ, 1992⁵
14. Wernher der Gartenaere: Helmbrecht. Text und Übertragung von H. Brackert, W. Frey, D. Seitz. 1972; ヴェルンヘル・デル・ガルテネーレ, 浜崎訳: ヘルムブレヒト物語, 1970
15. Heinrich Wittenwiler: Der Ring. übertragen von R. Bräuer, 1983; H. ヴィッテンヴァイラー, 田中泰三訳: 指輪, 1977
16. Moritz von Craûn. hrg von Ulrich Pretzel. ATB 45. 1962
17. アシル・リュシェール, 木村, 福本訳: フランス中世の社会, フィリップ・オーギュストの時代, 1990, (原著1909)
18. ジェラルド, ル・ゴフ, 池田訳: ヨーロッパ中世社会史事典, 1991, (原著1986)
19. J・M・ファン・ウィンター, 佐藤, 渡部訳: 騎士, 昭57, (原著1976)
20. プレティヒャ, 平尾浩三訳: 中世への旅 騎士と城, 1982 (原著1977)
21. ジャン・フラピエ, 天沢退二郎訳: 聖杯の神話, 1990 (原著1979)
22. 新倉, 神沢, 天沢: フランス中世文学集 2, 1991

(この小論をまとめるにあたっては, Bumke 教授, Fleckenstein 教授の著書に負う処が大きい。入手できなかった資料もその著書所載の原典引用文を利用した。)

〔注〕

1. フランス語の借用は, この場合またその実態の借用をも意味している。Turnier の起源はフランスであり, フランスから全ヨーロッパに拡がっていった。フランスにおける Turnier の全盛期は1170-80年代である。なおラテン語では*Troia*と言うが, これはウェルギリウス: アエネーイス, 第5巻600行以下に基づく。西欧中世の Ritterspiel は, アエネーイスが父の供養に行ったこの騎馬戦(580行以下)が原型であったのであろう。
2. Gottfried von Straßburg, Tristan の2109行の *turnieren* はこの意味で用いられている。少年トリスタンが父亡き後, 忠臣ルーアルのもとで受けた教育について述べた箇所である: 「彼(トリスタン)は, 楯と

槍を持って巧みに騎乗し、馬の両脇腹に正しく拍車をくれ、大胆にギャロップで駆けさせ、馬の向きを変え (*turnieren*)、手綱を緩めて走らせ、馬の横腹を両のももで圧して御したりなど、騎士の習いに従った騎乗の術を学んだ」(Tr. 2103ff)。

3. Mölk, Ulrich: Philologische Aspekte des Turniers. In: J. Fleckenstein (Hg): *ibid.* S. 163
4. 教皇イノセントⅡの召集した Clermont の公会議で決議された。なお、13頁参照。
5. 以下2人の剣を振っての戦いの描写が続く (7138-7272)。注意すべきことが二つある。1) 決着のつきそうにない激しい剣の戦いを、借り、返済、信用、債務などの商人用語を用いて描いている。このメタファはクレチヤンの「イヴァン」では会話の形で僅か数行 (6250-51; 6258-6261) である。2) 2人の剣の戦いは、クレチヤンでは騎乗のまま行なっているが、ハルトマンでは馬を下りて戦っている。このことはおそらくイーヴェインが泉の国の王アスカロンを剣を振るって追いかけた振舞いを、騎士にあるまじき行為 (Iw. 1056 *âne zuht*) としたことと関係があるだろう。
6. 5つの戦法、特に第2と第3については解釈が分れる。Wolfgang Spiewok: *Parzival*. Band 2, S. 647; A.T. Hatto: *Parzival*. S. 403; J. Bumke: *Höfische Kultur*. S. 353を参考にした。
7. エーレクがイーデールスとはい鷹をかけて行う戦い (*des sparwæres strit*. Er. 455) の模様は、732-963行に描かれていて、ハルトマンは「槍の突き、一撃」の意で *tjost* を用いている。「はい鷹の戦い」に先立って騎士たちは聖霊ミサに出かけるが、また「比武を目指し (*ze ritterschefte*)、*turnieren* を好む者は、それ (聖霊ミサ) をするものである」(Er. 665ff) と言っているが、ハルトマンはこの「はい鷹の戦い」は *turnei* とは言っていない。
8. プレティヒヤ、平尾浩三訳：同書。
9. J. Bumke: H. K. S. 111, 359.
10. P. Ganz の注では、*turnei*=Turnier, *ritterschaft*=ritterliche Waffenübung, Turnier としている。二つの語は同じ意味と思われる。vgl. Hatto の訳：He often held tournaments.
11. Tirol 王が息子の Fridebrant に支配義務について教える教訓詩、13世紀中葉の作。
12. ジャン・フラビエ、天沢退二郎訳：同書。なお小袖姫のエピソードは、ヴォルフラム：バルチヴァールでは、リースの王メルヤンツと、リプバウト侯及びその二人の娘オビーエとオビロート (=小袖姫) になっている。
13. フランスの原拠に基づく作家不明の Märe。宮廷騎士の婦人奉仕のこっけいなパロディー。
14. L. Okken: *ibid.* S. 269; 例えば当時の甲冑の値段について、「甲冑に要する費用だけで、立派な農地のひとつに匹敵した」(デュビイ・マンドル、前川・鳴岩訳：フランス文化史Ⅰ, 61頁)。
15. ジェラルール、ル・ゴフ：85頁。イザベルは、ウェールズ、スコットランド、アイルランドに広大な領土を持つ大貴族リチャード・クレアの娘で、その居城の地名から「ストウリッギルの乙女」の名で呼ばれた。
16. アシル・リュシェール：*ibid.* 377頁。リチャード獅子心王が初めて Turnier をイギリスに移入したと言われる。なお、Bumke: H. K. 344頁参照。
17. ウィリアムについては、アシル・リュシェール：同書。375頁以下; ジェラルール、ル・ゴフ：*ibid.* 83頁; Bumke: H. K. S. 343, 368, 371, 439。
18. この後半の箇所 (201,6-17) は、ほとんどそのまま Ulrich von Zatzikhoven: *Lanzelet* (4471-81) に引かれている。
19. Jacques de Vitry. フランスの神学者。ランスの Akko の司教 (1216年以来)。彼の著作と書簡はフランス、イタリア及び十字軍国家の時代史を知る重要な資料である。J. Bumke: H. K. S. 376 f; アシル・リュシェール：同書。382頁。



Herr Walther von Klingen

騎士 Walther が馬を疾駆させ、槍を見事に相手に突き当てた瞬間を描いたこの図は、マネッセ写本 (=大ハイデルベルク歌謡写本, 1310～30年頃) の典型的な Tjost のミニアチュールである。騎士の紋章「王冠をいただく獅子」は楯と馬衣に見られるが、相手の騎士の紋章は通常描かれない。2人の騎士は側面から描かれているが、兜飾り(「2つの斧と孔雀の羽根」)だけは正面からの視点である。この一騎打ちを婦人たちがバルコニーから一喜一憂しながら観戦している。その様子を豊かな顔の表情、指の仕種で表わしている。



Herzog Heinrich von Breslau

Turnierに勝ったハインリヒ公は従者を引き連れて観戦者の婦人方のいるバルコニーの下に向かう。彼の奉仕する婦人から賞として愛の印の花冠を授かる。騎士は兜をとり手袋を外している。宮廷騎士の礼儀正しい態度である。公の紋章は「胸に白い三日月を持つシュレージェンの黒鷲」、馬衣にはこの紋章と共に白い文字が見える。つなぎ合わせると「AMOR（愛）」になる。公の前にはドラムをたたきシャルマイを吹く2人の楽士、公の槍（穂先は衝撃を和らげる鉄製の三叉のKrönlein）と兜・兜飾りを持つ2人の小姓。帽子をかぶりハンマーを持った男は馬の蹄を調節する役の小姓か。手前の2人は触れ役（Krogierer, Krier）で、紋章を見て騎士の名前、名声を呼ばわり競技者を振り立たせたり、勝利者を称えたりするのが役目である。（マネッセ写本）



Der Dürner

これは奇妙な図である。帽子を冠った中央の婦人が2人の騎士の間に割って入り、右側の騎士から槍を取り上げて、戦いを止めさせている。騎士の Der Dürner (Dürner=Türmer 塔の番人) は、自分の名前に由来する塔の紋章を楯と兜飾りに用いている左側の騎士であるから、敵方(その楯には紋章が描かれてない)に明かに圧倒されている。体の後半分は杵の外にはみ出ている。Der Dürner の奉仕する婦人が何故この場に及んで相手の騎士を説得し戦いを阻止したのか。愛する騎士の敗北が予感されたのか。相手の騎士にも心が動いたのか。観戦する婦人たちのジェスチュアは、この異常な出来事に強い関心を抱いていることを表している。(マネッセ写本)